

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第16回 ベネズエラ

セイコウ・ルイス・イシカワ・コバヤシ
駐日ベネズエラ大使

ベネズエラは日本に期待している

—経済面のみならず文化の面でも関係を深めたい—



セイコウ・イシカワ（石川成幸）大使は日系2世で、2005年から駐日大使を務められている親日家。石油を中心とした資源豊かなベネズエラの魅力や、日本への期待などを中心にお話を伺った。スペイン語で始めたインタビューは、すぐに流暢な日本語に代わった。

インタビューの一问一答は次のとおり。

—大使は日系人の少ないベネズエラで育たれましたが、どのようにお育ちになったかお聞かせください。

また、なぜ日本語が流暢なのかも教えてください。

大使 私はベネズエラ生まれで、父と母は日本人です。父は沖縄出身で、母は山梨です。1972年に生まれ、現在、42歳です。ベネズエラの一番大きな州ボリバル州の首都シウダ・ボリビアで生まれ育ちました。日本人が非常に少ない町で、私の世代の日系人は殆どいなかったもので、ベネズエラ人として育ちました。クラスメートには日系人はいませんでした。中学校には日系人は少しいたのですが、カラカスの大学に入学した時には、日系人が多いのに正直言ってびっくりしました。私と同じ境遇の方たちが大勢いることは幸せでしたし、多くの友達が出来ました。日系人の青年日本人会があり、ボーリングをしたりして集まることが多く情報交換もできました。ただし、共通の言語はスペイン語でした。日本語ができる日系人もいますが、できない人もいたので自然とそのようになったのでしょうか。15歳まで、毎年夏には、両親の故郷に行きました。父が山梨にいる母に結婚を申し込みに行ったときに、母の父親（自分のお爺さん）からいくつかの条件が出て、その一つが毎年里帰りをするものでした。結局、お婆さんが亡くなるまで毎年日本に帰り、その約束は果されました。そのおかげで、毎年夏休みに日本に行くことが出来た訳で、父と母の親戚との親交を深めることが出来ました。学校ではスペイン語でしたが、家の中では日本語を使うように父親から厳しく言われま

した。私には姉が一人いますが、兄妹の間ではどうしてもスペイン語になってしまうので、父親からよく叱られました。今になって父には感謝しています。大学はシモン・ボリバル大学で、金属工学を学びました。大学在学中に工場実習があり、ギアナ地方で日本企業が建設・操業していたペレット・プラントで研修しました。その際に技術責任者だった徳嵩とくたけさんに非常にお世話になりました。卒業後、2000年にアメリカに留学しました。ハーバード大学で経営を勉強し、その後ベネズエラに戻りました。アメリカでも短かったのですがボストンで研修をし、それからいろいろな仕事をやっていたのですが、外務省からスカウトされました。

—外交官になられてからの日本との関係についてお聞かせください。

大使 スカウトされたときに既にチャベス大統領になってしばらく経っていましたが、大統領の指示により外務省で新しいプロジェクトが立ち上げられました。国としてもっと輸出に力を入れるという戦略が立てられ、輸出を担当する組織が立ち上がったのです。初めは近隣のラテンアメリカの国々が対象でしたが、私が採用されると同時に、日本が対象国に加えられました。そして、2001年3月に日本に派遣され、日本ではビベロ大使の下で3年間仕事をしました。その当時も、ベネズエラの日本との関係は、投資案件もあり経済面では活発でした。しかしながら、チャベス大統領はもっとアジアとの関係を強めよと言われ、ビベロ大使は

エネルギー面での協力を力を入れました。日本側との協議が何度も続けられ、日本側も興味を示してくれましたが、うまくタイミングが合わずプロジェクト自身は立ち上がりませんでした。しかしながら、ベネズエラ国営石油会社（PDVSA）に対する日本からのファイナンス案件が実現しました。

この3年半は非常に勉強になりました。正直な話、外交官の仕事は初めてだったので、いろいろ戸惑いました。しかしながら、良い上司にいろいろ教えてもらい、また、多くの日本人の方々にも大変お世話になりました。特にJETROの方たちには感謝します。

—日本及び日本人の良いところや悪いところについてお考えをお聞かせください。

大使 日本の社会は「素直」である点が最も良いところ。また、一生懸命であること、話し合いで合意したことを必ず実行するという信頼感があります。一方、悪いところもあります。どこの文化でもそうですが、自分としては良いところを見習い、悪いところは悪いこととして認めることにしています。良いか悪いは別として、日本人というものが持っている日本の社会と文化を勉強するのが、外交官の仕事と思っています。日本で仕事をしている間に違和感を持ったことはありませんでした。それは、その国に初めて行ったときは、白いページにものを書くのと一緒で、素直に見ることが出来ます。時が経つと自分の色が出て来て、色がつくことによって大分見方も変わってきます。私は、その色を付けずに純粋にものを見るのが外交官として大事だと思っています。

—2005年8月に駐日大使になられましたが、どのようなことに力を入れましたか？

大使 大使になって、全ての分野を大事にしましたが、2009年からは特に日本とのエネルギー分野についての協力関係づくりに力を入れました。エネルギーに関連しているファイナンスや技術協力などについて関係強化を図りました。一方で、個人的にも文化面での関係強化が大事と考え、文化を通して両国間が近くなることに力を入れました。文化は経済的なモチベーションがないので、政府の役割が大事です。したがって、大使館として力を入れました。最初に立ち上げたのがベネズエラ文化週間で、食文化、音楽、ダンス、など広範な文化活動をいたしました。音楽の分野は、日本側にパートナーがいましたし、大使館の外交官にも音

楽家がいまいましたので、スムーズに活動が出来ました。ベネズエラの音楽の中で、特徴的なものはフォーク音楽です。これは非常に特徴があって、歴史の中でも他の国にない特異なもので、その普及に力を入れました。最近では、ご存知のエル・システム活動も紹介してきましたが、被災地の相馬市、岩手県の大津町でも活動が始まり、少しずつ日本でも普及していると感じています。美術の分野でも、展示会を開いています。数年前に、日本のスカラシップを得て、日本で美術を勉強している学生が何人かいましたが、彼らが日本で見たいものがあると言うので、代官山で展示会を開催しましたら、非常に好評でした。

—ベネズエラは豊富な資源と豊かな自然に恵まれています。ご紹介ください。

大使 ベネズエラには非常に魅力のあるところが多いです。まず、日本人にベネズエラを知っていますかと聞くと、多くの人から「美人の国」という回答が返ってきます。世界的な美人コンテストで優勝する数が多いことは確かで、ミスユニバースの歴史でも同じ国が連続して優勝した初めての国です。ただ、そのイメージを持ってベネズエラに行く男性は注意した方が良く、どこにでもミスユニバースがいるわけではない、と皆さんにご注意申し上げています（笑）。美人が多いというよりは、「美」を意識している女性が普通という一般的なことです。外形だけではなく、内なる美しさ、女性であるという自己意識、それが大事であると思います。

資源が豊かで、石油以外にもダイヤモンドや鉄鉱石が豊富です。一方、自然の面では、ベネズエラの南部にあるギアナ高地が有名です。NHKのドキュメンタリーなどで紹介されていますし、日本の観光客も徐々に増えてきています。皆さんが興味をもつのはエンジェルの滝です。落差はスカイツリーに東京タワーを乗せたくらい、素晴らしい光景です。いつもギアナ高地を強調しすぎると大使館員から批判されますが、自分の生まれ育ったところなのでどうしてもそうなります。確かに、カリブの素晴らしいビーチ、西側にあるアンデス山脈、そこには高いところまで運べるケーブルカーが有名です。平原のジャングル、世界で一番大きなワニ、カイマン・デ・オリノコもいますし、長い蛇のアナコンダや、いろいろな種類の動植物をみることが出来ます。何れにしても、ギアナ高地の素晴らしいさは「世界一」だと私は思っています。

一原油の価格が暴落しましたが、産油国ベネズエラの現状と今後の対応について教えてください。

大使 ベネズエラは原油の輸出国で、90%以上の外貨を稼ぎ国家の収入の半分以上を石油産業に依存しています。原油価格が世界的に下がっている今、このような時期こそいろいろ工夫をして改善しなければならないものがあると思います。現在のマドゥロ大統領は大統領選挙で勝ち、地方選挙でもよい結果を出しましたが、最近、経済を中心として改善を始めるとの政策を打ち出しました。まだまだ課題が残っていますが、政府が自らこれらの課題に取り組むと同時に、国民全体が政府と一緒に改善に取り組む意識が最も大事だと思います。その議論も国民の中で盛り上がってきています。また、この厳しい情勢下でマドゥロ大統領もチャベス前大統領が進めた社会福祉を大事にしています。

一ベネズエラは米国とキューバの国交回復の動きをどのように見えていますか？

大使 米国とキューバの問題解決は、ベネズエラだけでなく全ラテンアメリカの国々が期待していることで、今回の動きは素晴らしいです。日本ではあまり知られていませんが、2008年のトリニダード・トバゴで開かれたラテンアメリカサミットで、ラテンアメリカの国々は米国に対して一つの条件をだしました。キューバがサミットにどうしても参加すべきであると主張しました。その後の2012年に開催されたコロンビアのカルタヘナでの米州首脳会議でも33か国が、次のサミットにキューバが参加しなければ会議をボイコットすると主張しました。お陰で米国がその要求のみ、本年、パナマで開かれた米州会議にカストロ国家評議会議長が参加するという大きな動きがあったのは喜ばしいことです。オバマ大統領の強い意志で高いハードルを越えました。一方、ベネズエラと米国の関係ですが、問題はベネズエラ側にあるというよりは、むしろ鍵となるのは、双方の問題であり、米国もその意識を持つべきだと、チャベス前大統領もマドゥロ現大統領も言ってきました。ベネズエラ人、ベネズエラ政府としては、米国とは良い関係を持ちたいと思っています。お互いを尊重する関係で、お互いが利益のある形で、良い関係を築く、その為のメカニズムを何回も提案してきました。今年も「ベネズエラは脅威だ」という言葉が盛り込まれたオバマ大統領令が発令されました。これは、両国が求めているのと反対方向の動きであり、

ラテンアメリカとカリブの33か国すべてが批判しています。今は、米国の動きを見守っているところです。先週、アメリカの議会で民主党議員の数人から、大統領令はベネズエラとの関係改善を阻害するものだと非難が出ました。米国との関係改善の要望は変わっていないので、米国の姿勢が変わることに期待したい。

一ベネズエラと日本の関係強化のためのアドバイスをお願いします。

大使 日本はベネズエラのみならずラテンアメリカ全体に対する貢献力は大きいと思います。これまで日本が築いてきたラテンアメリカの信頼関係は大きいし、今後のポテンシャルも大きいです。ラテンアメリカが求めている技術力を日本は持っています。これからはもっとお互いがよく知りあうことが大事です。そのためには、両国間の交流を大きくし人間的な関係を深める必要があります。ラテンアメリカ33か国全部と良い関係を築くことは難しいと思われませんが、それをできるのは日本だけです。ほとんどすべての国々にODAを供与してきており、海外青年協力隊は日本の持つ大きな財産です。大勢の若者たちが、長い年月をかけていろいろな事業を立ち上げてくれました。草の根レベルで現地の状況を良く知って事業が進められているので、現地側も立ち上げられた事業に対し大きな評価をしている。引き続きこの活動を進めてほしいです。また、この分野では、大企業ばかりではなく中小企業が参加できるものが沢山あると思います。

安倍首相には期待しています。去年ラテンアメリカを訪問されましたし、今年も行かれる動きがあるようで、この方向で引き続きラテンアメリカと関係強化を図ってもらいたいし、是非、ベネズエラにも来ていただきたいと思っています。

一最後にラテンアメリカ協会への要望についてお聞かせください。

大使 日本にこのような協会があることは大きな宝だと思います。色々な問題があるかも知れませんが、できる限り情報発信に努めてください。伊藤大使をはじめとしてラテンアメリカに興味がある方々にお世話になっていますので、我々もアミーゴとして協会活動をサポートします。これからもラテンアメリカを日本の皆さんに大いに宣伝してください。

(インタビューー ラテンアメリカ協会専務理事・事務局長 工藤 章)



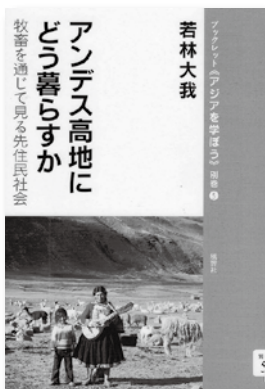
『21 世紀ラテンアメリカの挑戦 —ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』

村上 勇介編 京都大学学術出版会
2015年3月 185頁 2,800円+税 ISBN978-4-87698-900-3

国家の役割を縮小し、経済は市場に委ねるという考え方に基づくネオリベラリズム（新自由主義）をチリが世界で先んじて導入し、その後多くの国で採用された。しかし、90年代末以降はその弊害が厳しく批判されるようになり、その改良型が試行されるポストネオリベラリズムの時代になり、各国で左派が台頭し政権に就いたが、そこには積極的な役割を担う国家の必要性を主張するベネズエラ、エクアドル、ボリビア等の急進派と、マクロ経済はネオリベラリズム路線を継承して経済・社会の安定を維持しつつ社会政策・貧困対策を拡充していこうというブラジル、ウルグアイ、チリなどの穏健派、両派の中間と位置付けられるアルゼンチン、これに対するにネオリベラリズムが支配的なメキシコ、コロンビア等の3つの流れが存在する。

本書はまず急進・穏健左派の分岐点を明らかにし、全体の構成と分析を示し、社会の亀裂克服が鍵となる今後のラテンアメリカ政治を概説した後、各論ではエクアドルの先住民運動、コロンビアの和平プロセス、ペルーの社会紛争と政党の小党分裂、ブラジルにおける政党政治の安定化と非エリート層の台頭、ウルグアイでの周辺国型社主義、チリにおける政党システムの硬直化による政治不信を取り上げ、課題とこれからの行方を考察している。

〔桜井 敏浩〕



『アンデス高地にどう暮らすか 牧畜を通じて見る先住民社会』

若林 大我 風響社
2014年10月 66頁 800円+税 ISBN978-4-89489-775-5

現地留学、研究を行った若い研究者の研究成果を発信する本書が含まれるブックレットの本編では、中央アンデス南部高地の農牧複合社会でのフィールドワークで得た、リャマやアルパカ等のラクダ科動物の飼育、先住民共同体での農牧業の実態、クスコ市北方の標高 3,000 ~ 4,000m で生業を営むパンパリャクタ・アルタと、南東にある標高 6,372m のアウサンガテ山の 4,800 ~ 4,900m の南・東麓で牧畜を主に暮らすチリュカの村に入っの調査を基に、牧畜を軸とした土地利用のモデル化などの手法で二つの共同体を比較している。

アンデス高地牧畜の実態調査から、共同体帰属意識、放牧地利用制度の変容、農業に向いていないチリュカの人々の共同体外の耕地へのアクセス、道路整備がこの山奥まで行われるようになってから外界との接触・往来・移住の増大、ずっとカトリック社会だった所にキリスト教系新宗教が入ってきて、それまでの伝統的なカトリズムと癒合した年中儀礼が放棄されるなど、さまざまな社会の繋がりに変化が見えてきたと指摘している。

〔桜井 敏浩〕